

解題

山口剛

黄表紙について

一 黄表紙以前

「黄表紙」は戀川春町の「金々先生榮花夢」によつてはじめてその實を得たといはれる。それは「黄表紙」が當世風の寫實をなし、今様の洒落を盡すことを意味する。「赤本」の昔から、「黒本」、「青本」きて、「黄表紙」となつた「草雙紙」は、この安永四年に於て漸く子供の手から離れて大人のもの、通人のものとなつた。いふ所の、「草雙紙」とは、「赤本」、「黒本」、「青本」、「黄表紙」及び、「合巻」の總目であつて、江戸時代に於ける江戸の小説の一主潮を成すものである。

「草雙紙」の字義は、さまざまに沙汰せられる。草假名で書いてあるために、草の字を冠するともいはれる。すきかへし紙に灰墨で印刷する、その一種の臭みから臭草紙といふが、臭の字面を避けて草の字を書くともいはれる。また、草を草相撲、草芝居の草と見なして、常法通りでなく、格式張らぬ意味にとつて、草雙紙とは讀み易い堅苦しからぬ讀物の義にも解せられる。いづれの解釋が當れるか否かはさて置いて、これらの言葉はおのづから、「草雙紙」のいかなるものであるかを説明する。

「草雙紙」が本格の雙紙と對をなすのは、もと婦女童幼のためにした繪畫本位の小冊子であるがためである。その繪解の文が、おもに草假名によつて書かれる。すべてが軽い意味でとり扱はれるので、その製本も印刷も極めて簡雑であつた。たゞ時相の推移は、「草雙紙」の内容形式にも種々の變化を與へて、後には絢爛を盡したのも作られたものゝ、つひに「赤本」以來の繪畫本位に終始する。また冊子の大きさは、「赤本」によつて、半紙二つ切りと治定せられて、「合卷」にまで及ぶ。時に半紙全紙に刷つた事もあつたが、それは一時の變態に過ぎなかつた。そして一冊の紙數を五枚に限る。何冊の續物にせよ、この單位を守つてゐる。これも「赤本」にさだまつて、「合卷」になほその名残をとどめる。

「草雙紙」は、「行成本」の後をうけて、端緒を「赤本」に開く。「行成本」とは紗綾形、萬字つなぎ、毘沙門龜甲などの所謂行成長紙を附けて、金平物、また御伽草子などに關する繪



青本「風流鱗魚退」

物、また御伽草子などに關する繪

解本である。「赤本」亦それらの筋書や、御伽噺の幼稚なものであつて、元祿・貞享の頃から行はれた。その赤本といふのは、赤表紙の本といふことである。これよりさき、赤表紙の繪解本が天和・延寶の頃から存して居た。内容は、「赤本」とかはりはないが、その大さが例の半紙半截より小さいので、特に「小形赤本」の名によつて區別せられる。

享保の頃になつて黒表紙のものが出た、所謂「黒本」である。これに前後して萌黄表紙のものが出づる、所謂「青本」である。その萌黄色が黄色に一變したのが、即ち「黄表紙」であつた。

「黄表紙」はまた「青本」ともいはれる。「黄表紙」といひ「青本」といひ、表紙の色によつて區別せられる名であるのに、どうして黄と青とを混同するのであらうか。青表紙の本の流行期は短く、出版部數も少く、それに子供の弄びに過ぎないものとて保存に力むることもなく、従つてその本體は早くも跡を絶つて、後に、



「例一の容内の治

「青本」と「黄表紙」の名が曖昧となり、つひには、「黄表紙」の別名とまで混同されたのであらう、と稀書刊行會複製の鳥居清信筆、「風流鱗魚退治」の解説に見える。これは林若樹氏の考説に基くといふ。なほまた、「青本」の崩黄色と、「黄表紙」の黄色とは、ともすれば混同せられるほどに相似通つて居ることも考へ合はせられる。あの

馬琴の「江戸作者部類」中の所説の如きは、あまりに牽強附會に過ぎて居るであらう。馬琴の言は次の通り



郎 太 桃 (本 赤)

である。

「黄表紙なるを
あをと唱へるこ
と、理にかなは
ざるやうなれど
も、寶曆以後墨
の臭氣もあら
ず、世俗草冊子
と心得たるもあ
れば、草の蒼々
たる義を以てあ
をと唱へ云々」

初期の「草雙紙」

にあつては、かゝる表紙のうつり變りのみが問題とせられる、また表紙の上に貼る外題紙の地色・地質・繪模様・摺方のみが問題とせられる、それほど内容は「赤本」の昔ながらの稚ぶりを墨守する。しかし、その内に

入つて考へれば、さすがに所謂黄表紙ぶりへの近づき、「金々先生榮花夢」への歩み寄りが注意せられる。それと共にその歩みのゆるやかなことに驚される。

桃太郎・猿蟹合戦、さては初春の祝ひ物として、鼠の嫁入などの御伽噺を主とした「赤本」から、「黒本」となると軍記物・敵討物などが加はり、妖怪談が行はれる。さて「黄



（本 黒） 二 義 經

「表紙」にも、依然としてその筋はくりかへされるものの、淨瑠璃や狂言の色さしもあり、また詞書も多くなリ、地口をもとり入れて來た。短いながらに時の流行文句を引き、流行物に取材するものも見える。「赤本」の頃には近藤清春・鳥居清海・富川町雲（房信）などの畫工こそ署名すれ、作者名は明にしるされなかつた。それほど作者は介意せられなかつた。すべてが繪を主體として見られて居たからである。ところが寶曆の頃から、作者として

署名するものも現はれた。観水亭丈阿がそのはじめてであるといはれる。これらの小事も「草雙紙」の遅々たる進歩の上には、以て考ふべきことであつた。

二 黄表紙の變遷

安永四年の春町の一著は、かゝる間に出てゝ、草雙紙史上に一線を劃した。さればとて、その翌年から黄表紙のすべてが金々先生もどきの當世の洒落風になつたのではない。なほ舊様依然たるものが多い。こゝにその翌々六年の「花粧對兄弟」中の一葉をとつて「榮花夢」との相違を明にする。

安永から天明となつても、「黒本」の類は往々にして外題替をして出版せられる、けれど大勢の趨くところは「榮花夢」に尾をつけ鱗をつけた當世ぶりである。山東京傳は北尾政演畫作の名によつて「手前勝手御存商賣物」を出して、その間の消息を諧謔のうちに語る。

上方下りの「八文字屋本」と「行成本」とが、「青本」「洒落本」の流行に世を狭められることを、くちをししく思ひ、何とぞしてあれ等に貶けちをつけようと企んで、しきりと「赤本」「黒本」を唆す。けれどそのたくらみは思ふやうにならなかつた。一體が「青本」は貴賤の別なく、人の目を喜ばし、世辭にかしくいきを專として當世の穴を探し、俳氣も少しあつて毛筋程も抜目がなく、雨中の徒然つれづには豆煎と肩をならべ、女中様方御子様方の御最風強く、新板の工夫に新規を凝して居る上に、常に驕る心なくこれまで通りのすきかへし紙ですどす身持故、上方本の姦計をおひ退けるの力量があつた。隠謀は露顯する、「八文字屋本」「行成本」などは引つ解いて腰張にされる、下り繪本は皆顔へ無駄書をされる。「黒本」「赤本」は、本の仕立が悪

いから、惡事に加擔したとて定木にかけて裁ち直し、とち直しをされる。その根性のとお直しから、またもとのやうに繁昌する。

この趣向立は蜀山人の激賞するところとなつた、京傳の名は直に世に喧傳せられた。蜀山人の評は「黄表紙」四十八部の評判の書、「岡目八目」に於てなされ、京傳の書は總卷軸の榮位に推されたのである。それは天明三年の出版で



あるが、その前年にも蜀山人は「菊壽草」を著はして前年度天明元年の黄表紙四十七部を評した。「御存商賣物の「下り本」が「赤本」と「青本」を唆すくだりに「去年の春出たる青本の評判記を出し、おのゝ方の御繁昌は青本が發行故には同じ體裁の書「江戸土産」が出版せられた。「黄表紙」の世界は天明度に至つて極めて多事ならんとする。

黄表紙の妙は輕快奇響を縦横にするにある。天明度は狂歌川柳の隆興にも著しいやうに、輕快にすぐれ奇響に長じて居る。當時の「黄表紙」が多く傑作したものを出したのも偶然でなからう。即ち「黄表紙」の錚々たるは安永天明に聴くべく、その遺響は寛政にたづぬべきであらう。

寛政に入つて「黄表紙」の作風は一變した。その轉機は寛政二年出版の京傳の「心學早染草」にありといはれる。これは當時流行の心學を利用した趣向立てであつたが、新しいものとして大に迎へられ、ひき續いて續編續々編を出すに至つた。その作風は黄表紙界の全體にゆき亘つて、教訓を寓し、勸懲に托する作が多きを加へる。それはさうせねばならぬ事情も存して居た。安永天明はいふところの田沼時代であつて、世はたゞ太平の逸樂に流れ、人は通に憂身を甞し、洒落に心肝をくだき、そのはては子供の手から草雙劍を奪ひとつて



存 御

の遊戯三昧である。すべてがおもしろ、をかしいに精進する。されば田沼の没落、つゞく樂翁の改革が齎す世間の動搖もこよなき黄表紙種としか映らなかつたらう。「文武二道萬石通」「時代世話二挺鼓」「天下一面鏡梅鉢」などの數多くの作が現はれる。もとより諷刺としては輕いものに過ぎなかつた。されど事苟も時政に關する以上、幕府はその刊行を禁ずる。更に當時峻嚴を極めた風俗の取締は、京傳の洒落本の筆をも封じてしまつたので、彼は黄表紙方面に主力を致すと共に、一身の安きを欲して教訓物を草するのであつた。

さすがは京傳である、腕達者が棒縛りの跡をしこなすやうに、さういふ窮屈な條件の下にも縦横に滑稽の才を盡した。しかし碌々の徒はつひに他奇に出づる事がなく、趣向に困じては安永以前の化物話の復活を來し、軍記物の流を起した。



商 賣 物

寛政七年「黄表紙」の作風はまた一轉して敵討物の流行となる。敵討物は「黒本」時代、春町時代すでに一盛を見せ、その後も時々くりかへされたものゝ、つひに今日一代を席卷するやうな事はなかつた。楚滿人にしても、天明三年に「敵討三味線由來」を作つたが、何の評判にならずにをはり、こゝに「敵討義女英」によりて敵討物の中興の祖と稱せらるゝに至つた。要するに時勢の然らしむるものであらう。「黄表紙」の流れとしては新趣向を求めて、これに至り、「黄表紙」の外にしては、「讀本」が影響する。この流行はつひに京傳にも幾つかの敵討物を作らせた。

三馬は文化二年に「鬚訓歌字盡」を作つた。その趣向は京傳の「扮接銀煙管」「兩頭筆善惡日記」を踏襲した滑稽物であるが、そのはじめに「一部の大意」と題して一篇の作意を示すと共に又かういうて居る。

「近頃敵討の冊子に滑稽の名を奪はれ、三年筆を執らざれば、紋切形を失したる作者が筆の手まどひなり。冀くは江戸氣の皆様、敵討の堅みをやめて喜三二、春町傳來の青本に碎け給へと、おのが田へ引く水掛論云々」

また同年の作「親鮮時背藥」にはなほ一段と敵討物に對して不平を洩らし、洒落のために氣を吐き、又皮肉の趣向立をなした。その序の一節にいふ、

「そこで捻つて監るにすべて板元といへるもの内股の膏藥に等し。その謂は時花物には移りやすく、那にも箇にもべつたりにて、義理にも法にもかまはゞこそ、新作の誂も、ヤレどう參つた孔明が智慧を揮つて考へたる書の寓言はいゝや否、古風な洒落もいゝや否、唯當時よく賣れる敵討物ばかり鐫たいなと戯作者などには屁も放りかけず、そこでも此でもまた敵討、似たり、よつたり、討たり、舞つたり、繪ばかり看ても旨

の分つた一部の段取、是が流行といふものは、ハツア時なるかな／＼とひとり歎息した所が、おのれが粗拙の負惜しみにて敵討の本よりも遙に野暮の至りなり。夷狄に素しては夷狄を行ひ、郷に入つては郷に従ひ、敵討がばやるなら、人真似をして敵討と板元が勸にまかせて久しぶりにて筆は探れども、老實ばかりの趣向ては戯作者の戯の字へ對して面目なしと我意を立ぬく戯作の復興、りきんだ口はたゞけども、なほ從來の一冊五枚の定めを守つてゐたのを、この書は、「黄表紙」の五冊宛を合綴して前後二編二冊に製本した。いふところの「合巻」がこれである。内容と外形が相伴はぬ様になつて來た「黄表紙」としては



佛前盆一代記

※ヤツバリ作者も内股膏藥云々

しかし、その

三馬さへ翌三年の「雷太郎強悪物語」には「黄表紙」の體裁の約束に背いてしまつた。「黄表紙」は二冊二冊と續いても、また時に五冊六冊の續物を出して

は

當然の歸着であらう。世間はこれを歡迎した、今までの黄表紙仕立は影を消し、三冊合一冊、五冊合一冊などと附記して出版する様になつた。合綴の體裁は紙數を増加し、それと共に繪畫、彫刻、印刷、製本に意匠を凝した。斯くて「合卷」はつひに種彦の「たけなほ 藤田含源氏」「しやうほ 正本製」を出すに至つた。

「黄表紙」變遷の輪廓は大方かうであらう。もしその變遷を具象すべき作者畫工また作物については、本編收載するところの二十五種の解題の中にいはうとする。今はまづ「黄表紙」の一性質について考へようとする。

三 黄表紙の特質

敵討物といはず、教訓物といはず、洒落、穿ちといはず、「黄表紙」の全體を貫くものは戯である。かつて丈阿は署名と共に戯作の二字を置いた。春町、喜三さんじまたその戯作を本意とする。三馬の頻りに古風の洒落を説いて戯作家の本領を守らうとす



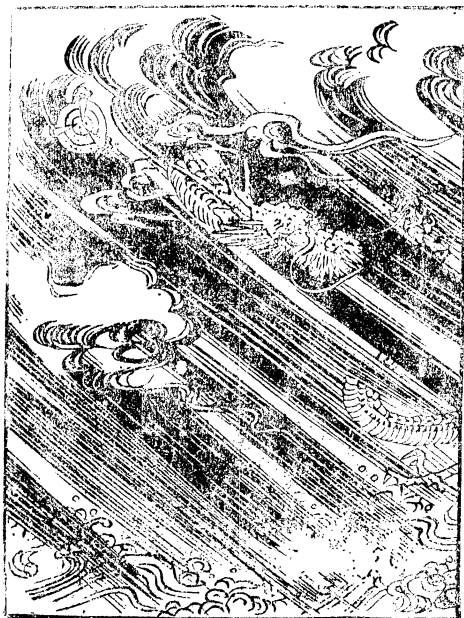
蜻とんぼ天てん上じやうのの腹はら 大ざうま
主しゅ佐さ太た夫ふ くわのうりやうのりやう
りやうのりやうのりやう
りやうのりやうのりやう
りやうのりやうのりやう

成 歳 千 三

るのは、よく「黄表紙」の本質を解したものだといはう。馬琴は江戸小説家の雄であつたが、「黄表紙」にはきまでの佳作がなかつた。「備前揃盆一代記」の如きは聞えた一つであるが、全體の立案は醜陋避くべきものがある。それといふのも、彼が戯作を解せず、戯作を楽しむことを知らずして、徒に「黄表紙」の讀者に迎合せんとするためである。彼が戯作を肯しとせざる事は「料理茶話即席話」の中の述懐に見える。

「かゝる太平の時に生れながら一つとして爲す事も無く、臭草紙の戯作者となり、あたらし月日を暮すこと、今の飯粒よりはかなき業なり、今より作の筆を絶く早く磨めるに如くはなし云々。」

京傳となると決してさういふ言葉を口にしなかつた。彼は戯作者たる事に甘ずるとよりはむしろ見榮とする。彼は嬉々として戯作の筆を執る。その「作者胎内十月圖」は、黄表紙の立案のはじめを胎兒の成長



蛇 蛸 云

に見立てたものであるが、その中の案前案後實虚散の處方に「黄表紙」の要素を細に示したのが見える。滑稽の間に、おのづから眞實を語る。

○教訓 三々意見にて
おろし細末 ○面皮 千枚厚く
いて用ゆ

○故事附 五分 ○小文才 三分 ○智慧 三文
はかり

○趣向 兩 ○工夫 一匁、うその皮を
去りて用ゆ

○滿意 三々 ○氣根 十匁 ○横好 一匁へたを去
りて用ゆべし

○案思 一兩 ○地口 三兩、意氣して
も用ゆべし

以上

十二味、硯の水一杯半入れて器量一杯にこじつける。小雅一へぎ入れる、案じ様常の如し。

なほ實虚散を盛る醫者の言葉として「毒だてが肝腎でござる、作者の毒だてと申すは、ちんぷんかんを横啣へにすべからず、故事來歴を生啣にすべからず、假名遣、片言、てにはの誤り、草雙紙には許します」とある。

「黄表紙」をかう心得て居る京傳は、いつも讀者と共に「黄表紙」を作り、又描くといふ態度をとる。たえず讀



人 山 龜

者と共に戯れ、共に笑はうとする。
 「金々先生造化夢」の金々先生の寝言のくだりに、魫の音コウコウ、口書めずリムニヤ／＼とのみ書いて、「此外にもし寝言の文句御案じ御座候はゞ御知らせ下さるべく候、早速書入候」とあるが如き、また、「三千歳成云鰐蛇」の鰐蛇天上の段のくだりに大薩摩主膳大夫とのみあつて唄の文句はなしに、たゞ「雲の中にいろ／＼面白き文句あまた御座候へども眞暗にて一向分り申さず候」と断つたなど、随分讀者を喰つたやうであるが、結局は讀む人、作る人と膝を交へてのうちに解けぶりである。

かゝる態度を持する者は京傳のみではない。黄表紙作者は皆これを心掛け、讀者また斯うあることを要求する。即ち作者も作者部屋を見せ、樂屋部屋を見せようとし、讀者もそれを覗き、そこに入りびたらうとする。京傳の作中に、京傳みづからを出すものが少くない。ききの「作者胎内十月圖」がそれであり、「京傳奪



妖 家

世之醉醒（あひさま）」もその一つである。このやうな趣向は、すでに春町の「其返報怪談」に見え、その後、「萬象亭戯作濫觴」全交の「全交法師常々草」などをはじめ、多くが數へられる。中にも一九のものにはその姿があまりに屢現はれて、やゝ煩はしきに過ぎる。

それ等の中に喜三三の「龜山人家妖」の挿繪は、よく喜三三その人の面影をうつし得たといはれてゐる。岡持、朋誠堂、龜山人は皆喜三三の別號である、故に狂詠一首を題してある。

岡持か朋誠堂か喜三三か龜山人かと聞くも氣まぐれ、

「黄表紙」からはなほ色々なことが考へさせられる。しかし、核心はこの戯であり、笑である、作者讀者共に相寄りて楽しむ點にあらう。今、「黄表紙」を繙くとせば、これを念頭に置くべきであらう。さもなかつたら、その一冊を見るにつけ、讀むにつけ、腹立しさに堪へざるものがあらう。それにしても、その當時に、これ等はどれほどの賣行をなして居たらうか。「江戸作者部類」を引いて書き添へる。

「此時（天明寛政）に當りて通油町なる地本問屋鶴屋二軒店にて毎春印行せる臭草紙は必作者を擇むをもて、前年の冬より發兌して春正月下旬迄、二冊物三冊物一廻にて一萬部賣れざるはなし、そが中に當り作ある時は一萬二三千部に至ることあり。猶甚しく時好に稱ひしものあれば、之を拔出して別に袋入にして又三四千も賣ることありといへり。」

同書には賣價の變遷が記されてある。それによれば初期は新板一冊物六文、八文、古板物は一冊五文。後に新板は一冊八文、古板七文。寛政には新板一冊十文、古板八文であつた。また天明頃には特に製本を美しく、三冊を合綴して袋入にしたのを五十文或は六十四文に賣つたといふ。

金々先生榮花夢

二冊

戀川^{こひがわ}春町の畫作で、安永四年^{あんえいしよん}鱗形屋^{うろこがたや}から出版した。從來の作風を一變して黃表紙史に二線を劃した名作である。

春町は倉橋氏、名は格、通稱は壽平、駿河小島侯の家臣、狂歌名を酒上^{さけのうへ}不埒^{ふち}といふ、その戀川といひ、春町といふのは小石川春日町に住ひするためである。繪を烏山石燕に學び、喜多川歌麿と同門の友である。

黃表紙の作としては「金々先生」以外に「高慢^{かうまん}竊行^{せつぎやう}脚日記^{きゃくにじ}」「楠無益^{くすむえき}委託^{ていぎ}」

「鸚鵡返文武二道」が聞えてゐる。「鸚鵡返」を除いては自畫作であるが、また他の作者のために繪筆を執つたのも少くない。

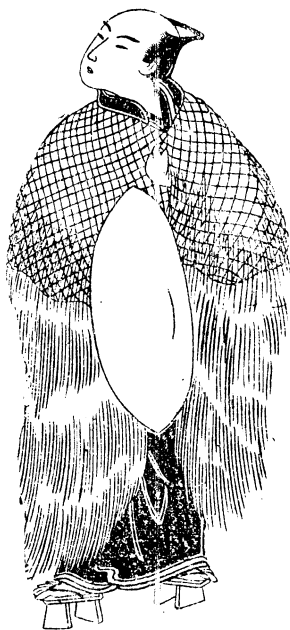
「金々先生榮花夢」は邯鄲



上之令子風

の夢の話に基く。邯鄲の夢は唐代李泌撰の「枕中記」に見える。しかし、春町は直にそれに據らずして、それに立案した謡曲「邯鄲」の輪廓を用ゐた。本文の中にも「邯鄲」の文句が引用せられる。和泉屋座敷の體は原文の様子を少しく更めてあり、主人清三と金々先生對面のくだりの「天の濃漿こころともいふべき程の酒を出し云々」は「さる程に天の濃漿や沆瀣かうげの盃、これまで持ちて参りたり。そも天の濃漿とはこれ仙家の酒の名なり。」をにほはせてある。

書中また「鉢の木」から出



加賀蓑麥



中之忌子風

けた言葉がある。この謠曲趣味は「榮花夢」がまだ、黄表紙の初期の作である事をおもはせる。けれど、黄表紙の趣向を一變させただけの當世ぶりも隨所に見出される。たとへば金々先生を雷子らいしの物ぐさ太郎に見立てたのもそれである。雷子は上方役者京屋雷子けうや、即ち二世嵐三五郎である。物ぐさ太郎は彼が江戸に下つた三年目の安永二年、市村座夏興行の「十帖源氏」の役名である。物ぐさ太郎と廬生と金々先生とおのづから繋がる一縷がある。春町はその細きものを利用するを忘れなかつた。しかも雷子はやつし事ごとに於いて、江戸の人々から迎へられてゐたのである。「うつちやつて置き、煤拂に出よう」といふ言葉がくりかへされる。これは明和七年板の「辰巳の園かみ」に「構はぬといふ事、物の見えぬ時にいふ事を諸事に用ゐるなり。」と註記せられた通言である。また深川の遊所での唐言からことは、これも「辰巳の園」に説明せられた通じ言葉の類である。



菱巾頭田竹

菱巾頭作與

こゝに書中の唐言を註する。一はゲンシロウサンガキナサイト。一はイマイクカラマチナトイツクタンナである。春町は當時流行の通言をもとり入れて、こゝに當世ぶりを發揮せんとする。それと共に挿繪の上にも當時の風俗をさながらに描き出さうと努めた。

安永二年板の「當世風俗通」は當時の江戸の風俗を如實に傳へる。著者の金錦先生は、或は春町の變名であるといはれ、或は喜三二の戲名であるともいはれる。いづれにもせよ、その挿繪は春町の筆に成つた。それに見える息子風と金々先生とを對照すると、春町の繪意が會得せられる。

金々先生の吉原通ひの打扮は同書の「上之令子風」に「竹田頭巾」を用ゐたもの。その説明に従へば、これは高慢といへどなほ柔和で行過ぎがないとの事、即ち金々先生のまだおとなしさを失はぬ程を見せる。品川通の打扮は以ての外の高慢で、歌は露ゆふ楓江安兵衛が、肺腑をさぐるといふしろものとある「中之息子風」に「興作頭巾」を冠つたもの、即ち金々先生の金に窮したのと共に遊蕩の漸く皮肉に入つたことを現はすのであらう。深川雪中の姿は所謂異體の一つ、これも流行の加賀蓑姿である。これらの道な風俗の前後に野暮な田舎の風俗を配する、かういふ工夫が異常の喝采を江戸の或種の人々から送られたのであらうか。

しかし何といつても「榮花夢」には先驅者の堅さが籠つて居る。それは筋をずつとこまやかにし、もつと當世を穿つた見徳一炊夢と比較すれば一層その感を深うする。「一炊夢」は喜三二の作であつて、「榮花夢」の趣向に倣つたものである。京傳もまた「金々先生造化夢」を作つたが、これはその外形を借りて内容を新にする。

親おや敵かたき打うち腹はら鼓つづみ

二 冊

喜三二の作、春町の畫、安永六年、葛屋の開板である。

お伽噺を主題とすることは赤本以來の傳統であるが、さすがに此頃となつては、筋をわづかに變更したゞけでは満足せず、世間周知の筋の上に立つて何かの新しみを加へようとする。この作はかち／＼山の話の後日譚といふ形式をとり、子狸が親の敵の兎を討たうとする、兎はぢ／＼の息子と子狸との義理合から切腹する。また子狸が手引して獵人に殺させた狐の子は狸を殺して親の敵を打つといふ趣向である。

その芝居が／＼りをすべて洒落で運ぶのが、この面白みであらう。當時の名物川魚料理中田屋、即ち向島の葛西太郎が持込まれてある。葛西太郎はもと隅田の堤下に鯉を賣つて居たが、やがてそれを肴の麥飯料理で世に知られるやうになつたといふ。圖中の看板に麥飯菜飯の目が見える。兎が切腹する、狸が一刀兩斷にする。上半分が鶴、下半分が驚となる。ある歳の夏の早天に鰻鮓が拂底で中田屋が困り切つて居ると、鶴と驚とが來て鰻鮓を吐き出す、これは中田屋が狸に追はれる兎を庇つてやつた恩に報いるもの、その鰻が即ち反吐前の大蒲燒、後の江戸前の大蒲燒であると洒落る。

さういふ洒落ぶりは、遂に「榮花夢」の上に出づる。春町喜三二の相違ばかりでなく、安永四年より五年六年といふ時の移りがさういふ運びをさせる。鶴と驚が鰻を吐き出す場合には「無間鐘」を用ゐた。狸と獵人が兎詮議で葛西太郎の主に迫る時、女房が「獵人の袂も」と歌ふのは、琴曲の「ふき組」を假りて、始皇帝の宮中の難を附會したのである。

作者喜三二は秋田藩士で平澤平格といふ。江戸住の留守居役である。狂歌狂詩に長じ多くの狂名を有する。手柄岡持、韓長崎、朋誠堂、龜山人などといふ。黄表紙の作には「鼻峰高慢男」「鐘入七人化粧」「長生見度記」「文武二道萬石通」などの聞えたのがある。

長生見度記

二冊

喜三二の作、春町の畫、天明三年の薦屋の板である。

これが春町の「楠無益委記」の趣向の模倣であることは本書の序にも見える。喜三二と春町との間には密接の關係があつて、喜三二の作に春町が描いたものも少くないが、その作にもまた交渉を有する。喜三二の「文武二道萬石通」が成ると、春町はその趣向を襲うて「鸚鵡返文武二道」を作つた。

しかしこれは喜三二春町だけのことでなく、黄表紙の全體に於いて見らるゝ現象である。模倣、踏襲、時に剽竊も、人は咎めることなくして、却つてその染め直しぶり、焼き直しぶりを評價する。作者、讀者、すべて悠々の間にあつた事が考へられる。

「無益委記」くはしくは「夫は楠木是は嘘氣無益委記」といふ、天王寺の未來記に擬して、未來の風俗を豫想して滑稽を弄したものの。安永八年の出版である。その手法は現に見るところを誇張するか、或は反對をいふにある。たとへば大通の羽織長さ三尺八寸五六分といふのは、當時長目になつて來た羽織を誇張したものである。放蕩娘が悪原へ通つて母親の勘當をうけ、新吉原に男郎を出すとは反對をいふことである。その反對のいひ方はやり手婆は貰ひ手爺となり、禿は「ぶるか」とよぶとある。

「長生見度記」は、その手法をさながらに用ゐて、材料をその遺漏にとる。たゞ二者を比較すれば、その誇張が漸く内端になつたことが注意せられる。即ち穿ちが細やかになつたといはれよう。江戸芭蕉塚の三十三所、また發句の節物などは、たしかに當時の俳人の弱所を衝くものであらう。劇場の陳皮買はよい見つけ所であらう。

「無益委記」においては一般的のものがいはれたが、これは一人一事に觸れて來た。従つてその穿ちは強く響く。萩寺の萩寺におけるが如きがそれである。また角力のところの「今度の地藏獄は小さな男だが轉ばぬ奴さ」とは身長七尺五寸といふ名物角力釋迦獄の穿ちである。敵役の中島三甫右衛門をおやまとし、おやまの岩井半四郎を敵役としたのは當時*



楠 無 益 委 記

*の人々の一目見て笑ひこけたことであらう。

この趣向は竹杖爲輕によつて天明四年の作「夫従以來記」に持ちこまれた。そのうちの穿ちがいよゝこまやかになつて行く。

中に草雙紙についていふ。

「わいゝ天王一萬八千年に當つて、草雙紙は大人の讀む物となり、正月三日會初ありて、それより月々會讀あり。

丈阿が草子に大木の切口で太いの根ときて合點かゝなど、申すは至つての古文字で、一通では解せませぬ。たとへて申せば、喜三三は狙株、春町、四方は春臺、南郭、吐芳は東涯、通笑は朱子學で一體が堅う御座

る。この趣向は萬唐丸、即ち書肆萬屋の主人重三郎の自作といふ「本樹眞猿浮氣嘶」においてやゝ一轉する。これは「三未來記」がなす豫想を豫想にとゞめないで、實際に行ふことより起る失敗のをかしさを叙する。たとへば正月の遊びに大宮人の子の目の遊びをうつして、金儲をしようと、東帯、直衣、狩衣の貸衣裳まで仕込んだが、誰も來手はなく、夜鷹ならぬ晝鷹を出しても遊ぶ折助一人もないやうなをかしさである。

右通 腔多雁取帳 三冊

奈時野馬乎人の作、忍岡歌麿の畫、天明三年、萬屋の開板である。

作者奈時野馬乎人とは、卷末の印章によつても明であるやうに志水燕十の別號である。燕十はまた志水裡町齋ともいふ、通稱は鈴木庄之助、烏山石燕の門人、挿繪を描き、また洒落本を作つた。

本書の序によれば黄表紙の作は、これがはじめのやうであるが、實は天明元年に「化物二世物語」を作つた、但、これには燕十の名を署する、それを避けて今の名を用ゐ、黄表紙の初作といふのは何か事情が存して居らう。

畫工忍岡歌麿は燕十同門の名手喜多川歌麿である。忍岡といふのは、その當時の住所を冠したのである。藤井乙男氏によれば、本書は赤本「只とり山のほとゝぎす」からの思ひつきとの事。黄表紙と赤本との關係にかやうな譯合が多からうが、赤本の類は多く散佚して、後人をして考察の途を絶たせる。「只とりの山のほとゝぎす」も上巻のみが存する、それには萬徳長者が戯れに鴨を捕るとて二三十羽を腰に挿んだところが一時に羽ばたきして舞ひたつので、長者は虚空に上る、そして七福神の隠里の酒宴の席に落ちるとある。即

ち燕十は、その長者を遊蕩の餘り主人から追ひされた貧しい番頭に代へ、七福神を大人國の人々に代へる。

赤本の下巻との關係は不明であるが、本書はその大人國を持たんだことに興味がある。大人國小人國の不思議の世界はすでに「風流志道軒傳」「和莊兵衛」などによつて展開せられて居る。燕十はそれを利用する故に「雁國」などといふものを作り出した。

そのやうに利用しながら、談理に陥るを避けて、飽くまで洒落て通したことが工夫であつたらう。金十が當時竈屋に身を窶して居たところから、大人國で手鹽の竈をかけ、その大きいのに困じて、どうせうと摩子の道成寺の身振でゆくのも工夫なら、その竈にはちかれて、もとの住所に飛びかへるといふおちもまた捻つた工夫であらう。

狂言好野暮大名

三冊

岸田杜芳の作、北尾政美の書、天明四年の出板である。杜芳は岸田豊治郎といふ表具師、芝に住した。本書の署名に芝櫻川と冠らしてある。杜芳が櫻川杜芳ともいふのはその住所による。黄表紙の作が十數種ある。また狂歌に遊んで言葉の綾知といふ、本書對面のつらねの下の署名はそれである。

書工政美は別に蕙齋、又杉卓と號す。錦書、黄表紙の作多く、名手として聞えて居る。作者未詳の黄表紙評判記である天明五年板の「江戸土産」に、この作の評が見える。當時の讀者にはどういふ點が注意せられたかを示すために左に引用する。

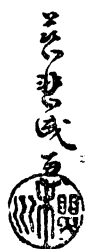
○中の巻にて松葉屋の女郎を惣仕舞にして、お屋敷へ召し、狂言を申しつける所にて、花魁のいふ書入に

古人櫻川杜芳似顏



天明以芝櫻川三鴻所居佳

表具師岸田豊治云



わつち等はいに芝居を見た事はおせんせんと有る。□名にし負ふ松葉屋の花魁が芝居を見ぬははづかし、潮來か輕井澤なら知らぬ事。△答「此人も正直な人だ、態ときう云つて、はぐらかすのだわな、潮來や輕井澤とは江戸の内か。」

「狂言好野暮大名」は大名と遊女と俳優とのとり合せが面白いと見られる。大名屋敷の素人芝居に遊女を參加させたのが趣向であらう。大名屋敷の素人芝居は天明時代にはない事ではなかつた。白河樂翁の「燈前漫筆」にいふ。

「淨瑠璃三味線の如き賤しく、しかも淫哇というて人の心を蕩し、和に流れ、無禮失義に陷るものを、高貴の方にも慰みとし給ふもありといふ。是を聞いて慰みにし給ふだにあるに、後に自ら其藝を習ひ、はては芝居物眞似などいふ賤しき者の業をなし給ふもありと聞ゆ。貴き御身にて勿體なく歎はしき風俗なり。」

俳優が俳優としての技藝を離れて戯れる茶番狂言から出で、素人が無理にも黒人めかきうとする素人狂言は、明和の頃から流行しはじめて、所謂田沼時代の天明の頃はその極に達した。この作はその世相を穿つにあつて、その意自ら樂翁の慷慨と反する。芝居好でありながらなほ野暮から脱し得ぬをかしきを嘲弄する。元祿期に於ては大名の吉原通ひも稀でなかつた、天明にはもう聞かざる事である。作者は大名を吉原に連れて行かずに、遊女を屋敷に推參させる。かういふ事もあるべき筈はない。作者はそこに滑稽を企んだ。作者は何故松葉屋を選んだであらうか。其處は素人芝居の流行つたところといはれる。そこに穿ちの一つをおいたのであらう。此書は杜芳の芝居好である事と合せ考へ、またその弟子櫻川慈悲成に幾多の素人芝居關係の著述のある事を考へると、おのづから領かるゝ節がある。此の項中に挿入した肖像は慈悲成が三馬の需によつて描いたものである。

御手料理
御知而已

大悲千祿本

一冊

芝全交の作、北尾政演の書であつて天明五年葛屋の開板である。全交は山本藤十郎といふ大藏流の狂言師、西の久保神谷町に住居するので芝と名乗る。この人に對しては馬琴も和漢共に學問はなけれども滑稽の上手にて當り作多しと評した。「鼻下長物語」「白髭 大明神御渡 申」「十四傾城 腹之内」「大違寶船」などがある。また自傳めかしたものに「芝全交智恵程」「全交法師常々草」がある。田村政演は山東京傳の畫名である。「大悲千祿本」の構想は謠曲「田村」に基く。それは清水千手の觀音の靈驗によつて田村磨が鈴鹿山の鬼神を退治した事が書かれてある。中にも千の矢先の辭は人口に膾炙して、時には五百噓など、川柳に擲噓せられる。しかし全交はこれを正面から受けて、滑稽を縦横にする。即ちこれは田村磨鬼神退治發端説といふよりは、手に關するいろ／＼を巧みに案配したもの、御手料理とは自名自證であらう。此書全體でわづか五枚の中に手といふ言葉によつて聯想せられる程のものを盡して、時に巧みに猥意を匂はせ、時に巷説をとり入れたなど凡手では出来かねる事であらう。その巷説を利するとは、俠客として知られた神田の與吉、「神田與吉一代記」に書かれた者の女房の噺をもとり逃さぬ事である。また同じ條の淺間山から降つた云々とは、此書發行の前々年七月の淺間山噴火の折、江戸に砂が降り、また毛のやうな物の降つた事を意味する。その當時の落書に「砂毛歌」といふがある。

「天明三卯年七月六日頃より信州淺間山燒候由、六日暮時比より、八日迄、震動、並灰降る、毛降る。

砂や降神代も聞かぬ田沼川米くれなゐに水のもふとは。

浅間しや富士より高き米相場火の降る江戸に砂の降るとは。」

本書は大當りにて板が磨滅したゝめに後には手に入れ難く、黄表紙好として知られた下谷上野町京紺屋の主人はこの一冊に一分を投じた事が「忘れ残り」に見える。また幸堂得知は「大通世界」に嘉永の頃或藏書家が蘭商何某が秘藏する事を聞出し、態々田向いて譲り受けようとしたが、先方も惜しんで金銭に換へ難しと謝絶するので、色々交渉の結果煙草の緒メ玉と交換した事をするして居る。或は同じ人の同じ出来事が二様に語られたのでなからうか。

江戸生艶氣樺焼

三冊

山東京傳の畫作、天明五年蔦屋板。京傳は岩瀬傳藏、その京傳の號は銀座に住ひするとて京椅の傳藏の義をとつたのである。はじめ畫を北尾重政に學んで荇齋政演と號した。安永頃は他人の著書に挿繪を描いて居たが、天明に入つて自畫作を出した。

天明二年の「御存商賣物」が蜀山人に認められてから作名大いに聞えた。しかし、まだ他人の作の挿繪をも描いてゐたが、寛政に入ると専ら述作に當り、自畫の暇もなく、挿繪をば歌麿、清長、豊國等に囑することも多くなつた。實に黄表紙界の巨擘であつて、また洒落本の重鎮である。

その洒落本のために處刑せられるや、力を讀本に割くの外、すべてを黄表紙に畫した。その當り作といふだけでも列擧する煩に堪へない。中にも「艶氣樺焼」は最も知られて居る。

この書は、醜貌ながら自惚心強き男の金に飽かして浮名を購はうと苦心するが、事毎に失敗してゆく痴態

を語る。

その失敗の一つ――を逆に見てゆけば、自ら當時の色男の資格のいかなるものであるかを知ることが出来る。その主人公艶二郎には粉本が存するといはれる。その一つは高田與清の「松屋筆記」に見える。「岸本田豆流は金座の手代の孫なり。その祖父引負して金座を逐はれ、遂に町人となる。その子は草雙紙の圓次郎が事なり。」圓次郎は艶二郎の誤記であるが。艶二郎は朝田榮次郎に當り、遊女浮名は瀬川に當るわけである。榮二郎は賣名のために讀めもせぬ群書を買集めた*從ふべき節々を書中に見る。とにかくに賣名の自惚男何某は京傳の筆によつて廣く世に紹介せられた。艶二郎の名は遊里においては自



初代豊國の描ける京傳の像

ことであらう。
艶二郎粉本説はまた「山東京傳一代記」にも見える。それには太申の事蹟を書いたとある。太申とは三十間堀の富豪和泉屋甚助、賣名のために手段を擇ばなかつた者である。果してそれだとすれば、遊女は豊里に當る譯である。しかし前説に

*といふ。して見れば、めりやすのくだりの挿繪の艶二郎の背後の本箱の源氏伊勢の蓋書は、それを暗示することであらう。

惚の異名となり、醜男の象徴である艶二郎の牡丹鼻は京傳鼻と呼ばれるやうになつた。

この書の大いにもて囃されたのは、狂言心中の愚さ、また「道行興鮫肌」の文句のをかしさもあることであるが、吉原の穿ちを巧みに書込む點にもあらう。その一例は茶屋の女房の詞「木挽町で高麗屋が墨河さんをするさうで御座いますね。」に見られる。墨河とは吉原江戸町扇屋の亭主であるが、嘗て素人芝居で曾我の工藤を演じたことがある。「通言總離」に

「墨河さんが工藤で、玉

屋の山三さんが五郎で

大門の四郎兵衛さんが

祐成でをかしい事が御

座りやしたつけ。」と見

える。こゝに高麗屋の

四代目松本幸四郎は天

明四年正月は市村座で

工藤を演じて居る。即*

とある柱の聯である。それが「小便組などいふところは御免だよ」といふ詞書と相俟つて興を惹く。「小便

組」といひ「小便無用」といふのは、妾がわざと寝小便をして仕立金をたゞ取りにする當時流行の奸策をさ

していふのであつた。



＊女房のいふ墨河さんとは工藤を意味する樂屋落である。

またそこにある「歌姫」とは松葉屋の女郎で、京傳の馴染である。この種の樂屋落も隨所に見られる。

これはまた京傳の自畫だけに挿圖の上にもいろ／＼の工夫がある。その一例は妾抱への圖中の「小便無用」

とある柱の聯である。それが「小便組などいふところは御免だよ」といふ詞書と相俟つて興を惹く。「小便

組」といひ「小便無用」といふのは、妾がわざと寝小便をして仕立金をたゞ取りにする當時流行の奸策をさ

「艶氣樺麴」の世評に氣をよくして京傳はその續編を草した。洒落本の「通言總離」と黄表紙の「碑文谷利生四竹節」がそれである。「四竹節」は艶二郎の子艶太郎の醜男が、一時碑文谷の仁王尊の靈驗によつて美男となつたことを書く。黄表紙作者が世の流行を題材とする事は、神佛の流行にまで及ぶ。天明七八年からの流行佛となつた碑文谷の仁王は、京傳をして此の作をなさせ、金交をして「拜壽仁王參」を作らせた。同年の三河島不動の流行は、また京傳をして「三河島御不動記」を作らせた。



新板
呼継
金成植上
板元

また新なる失敗を重ねる。この駿河安倍川の川原の道行の繪姿と、あの向島堤の繪姿の類似を比較するを要する。また一九に「唐人寝言」がある。これも二代目艶二郎と冠らして居る。

艶二郎の趣向はまた時鳥館主人をして「呼継金成植」を草せしめた。これは主人公金鶏が艶二郎を眞似て、例の狂言心中をもなして、

順廻能
名代家

莫切自根金生木

三冊

唐來三和の作、千代女の畫、天明五年、葛屋開板。

三和は加藤氏、通稱を和泉屋源藏といふ。もと士籍に列して居たが、故あつて町人となり、本所松井町なる私窩子茶屋和泉屋の婿養子となつて家業を嗣いだ。言行共に老實の好人なるに、さる渡世をするは過世あやしむべしといふ人多かり」と「作者部類」に見える。

また「能文にはなけれども、趣向は上手で、折に當り作もありき」と同書に見える。

黄表紙には本書の外「天下一面鏡梅鉢」が大に行はれ、洒落本には「和唐珍解」「通神孔釋三教色」が聞えて居る。



植成金繼呼

畫工千代女は歌麿の門下、それが挿繪を描ける黄表紙も數種ほどある。

この作の趣向は黄表紙類想の一つともいへうか。黄表紙には金欲しやに堪へずして「無閒鐘」を撞く趣向は隨所に見えるが、それと反對に金の置場に困却するやうな筋もくりかへされる。

これは黄表紙の出版が正月であることにも關係があらう。春のもの、正月の物と祝儀の意を籠めるためである。それはまた赤本以來のことである、たとへば赤本に鼠の嫁入が屢々用ゐられたのも、子孫繁昌を祝ふためであつた。

その類作の多い中にも、さすがに本書は傑出して居る。また外題の同文であることが世評に上つた。「きるなのねからかねのなるき」と上から讀んでも下から讀んでも同じことなのが、盡きせぬ金のめぐりを示す。故に順廻能名代家とも冠したのである。

この作は春町の「榮花夢」にも基いて居るが、主として同じ作者の「金銀先生再寢夢」から脱化して居る。「再寢夢」は、金銀先生が南鐐に唆されて小判を海へ棄てゝしまひ、はじめこそ貧を樂しんだものの、後には貧に苦しむ夢物語である、これには多少寓意があるが、三和はその貧の苦しみを富の苦しみに更へたのである。



金　々　先　生

文武二道萬石通

三冊

喜三二の作、歌麿門人喜多川行磨の畫、天明八年
葛屋の板。

天明四年三月、田沼意次が殿中において、佐野善
左衛門に斬られてから、さしもの田沼の權勢が搖き
出す、落首の類が頻りに行はれた、黄表紙も亦それ
に取材する。六年いよいよ田沼の没落となり、七年
白河樂翁の改革が端を發してから、落首更に加はり、
それに關する黄表紙がひと盛を見せる。黄表紙の時

政諷刺めくもの出たのは、この時に極まる。それが中にも三和の「天下一面鏡梅鉢」と、喜三二のこ
れが最も流行したといふ。「江戸作者部類」に「文武二道萬石通古今未曾有の大流行にて早春より袋入にして

市中を賣あるきたり、亦本の作ありてより以來かばかり行はれしものは前代
未聞の事なりといふ」とある。

萬石通は米と糠とを分ける道具、作者はそれを假りて、文と武に士を分け
るのは、いふ迄もなく樂翁の文武勸勵を諷した事になる。賴朝の言葉「先に
重忠に計らせ、文武の性をふるひわけ、ぬらくらの面々は七湯にて晒し、大



夢 寢 再

磯にて身上をふるはせ、文武二道に導かしむ」は、その作意の底を割つたことである。

しかし作者は、その全體の行方もさることながら、寧ろ遊藝のすべてを文と武とに分類する牽強附會を得意としたことであらう。この作の行はれた爲に、官憲から要せられて戯作の筆を絶つに至つた。

春町がその趣向に倣つた「鸚鵡返文武二道」も亦流行したことは「作者部類」に「これも亦大半紙摺りの袋入にして、二三月頃まで市中を賣あるきたり、流行此前後二篇に勝るものなし。當時世の風聞に右の草紙の事に就て白川侯へ召されしに、春町病臥にて辭して參らず、此年寛政元年巳酉七月七日歿」とある。或は自殺したとも傳へられる。



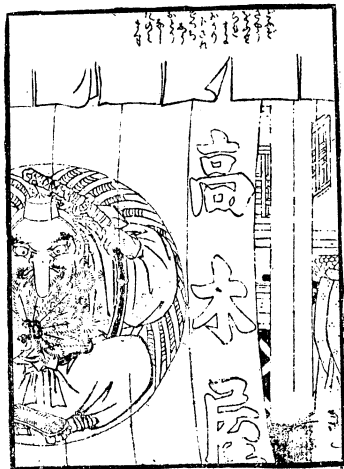
磨 玉



從 夫



青 砥 錢



以 來 記

孔子^{こうし}縞^{じょう}于^お時^{とき}藍^{あな}染^{ぞめ}

三 冊

京傳の自畫作、寛政元年大和田の開板。

これも所謂寛政の改革を諷したものであるが、喜三二、春町の二著が武士の方面をうつしたのと異つて、これは町人の生活に終始する。

蜀山人の寛政改革の諷刺詠と稱せられる狂歌に、「孫の手のかいゝ所へ届き過ぎ足の裏までかき探すなり」といふがある。蜀山人自らは偽作なりと辯じて居るが、寛政の改革をば随分好感を以て迎へながら、一面に

於て、この狂歌と考へ方同じくする者も多かつたらう。さらでも物を誇張して、そこから滑稽を産み出さうとする黄表紙作者にあつては、あの改革は好個の題材であつた。

「楠無益委記」「長生見度記」「夫従以來記」の所謂三未來記は、時相の誇張と共に反對の場合を書示すことによつて滑稽を産ませたが、これは手の届き過ぎを趣向の旨とするだけに、すべてが誇張の上に立つ。そこに他の物との相違を見る。しかし京傳の趣向が三未來記に負ふところの多いのは一々指摘することが出来る。今「夫従以來記」中の一葉を抜いて本書の中のものとの對比の資とする。

題名は文武の奨勵から朱子學の勃興となり漢籍謬讀の流行となつた事にあて込めたのである。書中頻りに



天 道



人 間 一 生



大 福 帳



胸 算 用

經子の語句の引用せられるのはそれが爲である。

京傳の寛政改革に取材したものに「玉磨青砥錢」がある。樂翁を青砥藤綱に擬して、その政道によつて世の中皆眞面目になりゆくことを例の誇張して述べたものである。たとへば役者も舞臺を捨て、百姓となつて田を耕す、さすがに女形は鋤鋤も持てないので、芝居がゝりて田植をするなどのをかしさを傳へる。

なほこの後編として、京傳は翌二年に「藍返行義骸」を出した。また竹塚東子に三編として「磨光世中魂」がある。これも同年の作である。

大極上 心學 早染草 三冊
請合賣

京傳の作、政美の畫、寛政二年、大和田の板。

この書大に流行し、その作風世に弘まつて、黄表紙は「榮花夢」出て、洒落となるに對し、「早染草」出て眞面目となるといはれる。京傳の黄表紙の作風一轉の因をなすだけでなく、黄表紙全體の傾向を一轉させたものとして知られて居る。

一編の趣向は、人には善魂惡魂があつて、善惡の所業をさせる、しかも人が本心にある間は善魂よく惡魂



殺 鬼



摺 通 四



心 角 標



心 學 草 紙

を制するも、本心を失へば善魂は悪魂に壓せられる、故に人たる者は常に心を正しうして悪魂に乗ぜられぬやうにせよとの理を善玉悪玉の繪姿の面白さと伴つて書いた。據るところは勿論當時流行の心學である。主人理太郎の名、すでにこれを示す。また道理先生は心學の大家中澤道二を示して居る。

「早染草」はその筋合もさることながら、殊に善玉悪玉の繪工夫が喝采を博した。その工夫は喜三二の天明六年の「天道大福帳」から出て居る。喜三二は天道が善人に福を與へ、惡人に禍を與へるのが商賣であるとする。人、善をなせばその氣天に昇つて金銀を凝り成し、惡をなせば燒味噌となつて金銀の氣を減らす故に勸善懲惡は結局人のためにあらで、天の利益のためであるとする。今、赤穂の浪士の義舉があるのでその氣

天に昇つて天をしていろは藏を造らせ、これを假名手本忠臣藏と名づけるとの趣向を立てた。そして「忠臣藏」の事件は皆天道様が天人に指圖させてする事になつて居る。

政美がそれに描く時、天道様を日輪とし、丸をもつてそれを現はし、これに淨衣を着せた、また天人には熊手を持たせて雲間から人間の所業を助けさせた。たとへば九段目には天道様は天人に命じてお石がふりかさす刀を抑へさせる。天道様の言葉の書入に、

「お石が御無用といふ迄は必ず放すな。後に本藏が槍で突かれる時は止めずと突かせろ、あれは死ぬ覺悟で來たし、由良之助も大概推量して居る事だぞ。」

とある。京傳はその天道様から淨衣を剝いて、裸とし、それに天人の役廻りをさせ、それをまた善惡の二つに分けたのである。

この繪の面白さと話の筋合が無上の評判を得た爲に京傳はひき續いて翌三年に「人間一生胸算用」、五年に「勘忍袋 緒メ善玉」を出した。「胸算用」は善惡を心と氣とにいひ代へ、「緒メ善玉」はもとの善玉惡玉の名にかへして居る。

京傳は同じ趣向を更に持ち越して善惡を鬼と佛にしたのが、五年の「四人詰南片傀儡」、酒と餅とにしたのが「鬼殺心 角樽」である。

また善玉惡玉の趣向をうけ繼いで、これを善人惡人とし、しかも一體分身としたものに「扮接銀煙管」兩頭筆善惡日記」がある。

馬琴また京傳の善玉惡玉物の第四編として八年に「四遍摺心學草紙」を著した。これは玉の數を多くして

あつて首、金、替、涙、生根、善、惡、慾、膽、色、屁、手、珠また吉、凶など、いふ、例の馬琴の癖であらう。その序の一節にいふ、「昔時朋友山東何某、善惡一雙の玉を磨いて世に輝くこと已に三遍に暨べり。這頃耕書堂主人余にその四遍を需む。あゝ我川童子の屁玉を以てなんぞ卞和子の眼玉を欺ん云々。」

卽席耳學問

三冊

市場通笑の作、北尾重政の書、寛政二年、蔦屋の板。

通笑、名は寧一、俗稱は小平二である。「作者部類」によれば岡附鹽町に住した表具師と見える、また「戯作者小傳」に「通油町に住居し一生を無妻にして市中の仙たり」と見える。

安永八年の「虚言彌二郎傾城誠」を初作として引續いて寛政頃まで戯作を續けた。馬琴は「滑稽の才なしと雖も、いと古き作者なれば世の人に知られたり」と評する。けだし適評であらう。

その作では「御物好茶白藝」「一升酒底抜男」などが聞えて居る。

通笑の作は常に教訓を趣旨とする。されば早く「洒落の喜三二」といふに對して「教訓の通笑」の稱がある。重政も古き畫家である。書肆須原屋の子、獨學にて繪を好くし、文政二年八十二歳の高齡まで筆を絶さず、また人物の謹直を以て知られてゐる。畫名を政演といふ京傳はその弟子である。

「卽席耳學問」は、性格をも年齢をも同じうする作者と畫工と相俟つて、この謹直の書を成したといへる。通笑が教訓を専らにする事の不評判は、彼自らも知つて、天明三年には「教訓不仕候」と題したものを作つたこともあつたが、今年寛政二年、五十二歳の通笑は、この書の序において意のある所を明にした。卽ち「意

地にかゝつてしやつき張り、いつもの癖の十割まし」といひ、「御祖父さん御婆さん御土産に持よい、さし合禁物のないところを尻持とす」といふ。

この作は心學に基いてゐる、話手の老人の名をも心學を倒に「學心」といはせて居るほどである。心學は宋儒の説を中心に神、佛、老の説をも交へて極めて通俗的に處世修養の道を語る。京の梅田石巖にはじまつたが、その後を繼ぐ中澤道二が江戸に下つて講説するに及び江戸にも大に行はれた。さうでなくとも教訓通笑ともいはれた作者は、直にこれを利用したのである。

もしこの作を「早染草」と比較すれば、同じ心學物でありながら、いかに京傳の底意と異なるかを知ることが出来る。更にこれを浮世草紙「浮世榮花一代男」と比較すればどうであらう、同じく隠れ笠の趣向でありながら、一は畜類の心をも憐れ殊勝心を産み、一は閨房の秘をあなぐる蕩兒の満足となる。

またこれを京傳の「唯心鬼打豆」と比較したらどうであらう。これは後に「七色合點豆」と改題し、「榮花二代目」と冠書する、隠笠の趣向を豆男に代へた八文字屋本のを襲うたものである。京傳は間接に「浮世榮花一代男」から、直接に喜三三の「女嫌變豆男」からこの趣向を得た。淺草の観音から授けられた豆



唯 心

によつて、おのが魂を他の人や鳥獸の魂ととりかへる事が出来てしまふの惡戯をなすことを叙する。即ち「耳學問」の殊勝なるとは大なる相違がある。

言の抽象に趨るを避けて例を「唯心鬼打豆」からとらう。淺草觀世音から魂を自在に變替する豆を得た豆助は、吉原の遊女屋の前に立つ。その美しい遊女にひかれて、その女が飼つて居る狎と魂を入れかへる。もとは藝なしの狎であつたが、豆助が勝手な藝盡しをするので江戸一番の評判を得る。遊女の馴染客がそれを五十兩で買ひとる約束をする、そして其の金を狎の首に掛けて重くて苦しむのを見て興がつて居る。豆助は其の金が欲しくなり急に飛び出して田市にゆき深田の中へ飛び込む、魂をわが體に戻して狎の死骸を引き出して五十兩をせしめる。

豆助の惡戯はこれだけで済まぬ。彼は今度は賣卜者の姿をして、さきの遊女屋の前に立つ。例の遊女が身の上を見て貰ふと、狎で居た時の見聞を種にして、見通しと驚かせ、すこしの中に多くの見料を懐にする。豆助は魂を他にかへる間は時によい目にあふが、他の魂を自分の體に置く場合にはいつも失策をする。そのをかしさを主としたのが弘化二年の一筆庵主人「魂膽夢輔譚」である。

「即席耳學問」はかゝる比較の上に於て、一層通笑その人の特長を明瞭にする事が出来よう。



鬼打豆

廬生夢魂其前日

三冊

京傳の作、寛政三年蔦屋の板。書工の名なけれど、重政といはれる。

春町の「榮花夢」と喜三二の「見徳一炊夢」との趣向を合はせて、それに新様を寄せたもの。故に京傳は古きを温ねて、新しく書きかゆるが、即ち趣向の新しきといふものと序にいうて居る。この言葉はまた「黄表紙」全體の趣向にも及ぼして然るべきであらうが、兎に角に京傳はわざと據るところを示して奪胎のあとを語らうとする。「榮花夢」はいはずもがなであらう。「一炊夢」は邯鄲の枕を貸して榮華の夢を商ふ新店がある事に話がはじまる。その代金によつて夢の面白さ長さに差がある。ある若黨は三十二文を出して一時の夢を見る。晩の七つの鐘を聞きながら、永久橋あたりで舟饅頭を見て、舟に飛び乗る調子に水に落ちたと見て目が覺める。またある侍は四文錢一本をはづんだので、きんとした女郎を相方に坐敷も一杯に楽しむ夢を見る。さういふ中に蘆の屋息子清太郎は千兩にて五十年の榮華の夢を見ようとする。

まづ旅に出かける。江の島、鎌倉、それから京に上る。二十一から二十五歳までは京都に住んで近親めぐり、その間に江戸の三座の役者を呼び寄せて曾我の狂言を見る事もある。三十一歳に長崎へ行つて丸山の遊びをする。三十七八歳に唐土へ渡る。四十歳で江戸へ下り、吉原、品川、深川、新宿に金をつかふ。また俳諧に耽つて號を蘆生とつける。五十餘になつて道成寺の所作事、六十になると能を習つて、「邯鄲」を演ずる。七十近くなつて茶の湯に凝り、愈々七十になると我家なつかしく、もとの住居を訪ねる。もとより父の清右衛門はとうに亡き人であり、手代が百萬兩の身代を繼いで居る。今日しも家出を命日にした清太郎五十

年の法事をして居る矢先に、清太郎は歸つて來た。そして手代から身代を受取つたが、今までの惣勘定で無一物となり、剃髪して諸國修業に出ようとする。百萬兩持つて居る人も、百萬兩つかひ棄てた人も、共に生れし時は丸裸、あら面白や南無阿彌陀佛といふ悟である。

「一炊夢」の夢尙ひを更に進めて夢作りにしたのが「其前日」である。「榮花夢」を謡曲の「邯鄲」にかへして、金々先生ならぬ廬生のもとに復したのである。ここにも京傳の古きを温ぬる工夫がある。しかも京傳は、はじめに廬生を出し、それをして「榮花夢」「一炊夢」を美させる、これまでのを逆に見るところに新工夫があらう。今更に「枕中記」に於ける廬生の夢の本來の姿を知らうと欲する。唐の開元十九年、廬生が邯鄲途上の客舎で呂翁といふ道士に邂逅する。いろいろと話をして居るうちに睡氣を催すと、呂翁が枕を貸して呉れた。その時客舎の主は、黄粱を炊きはじめた。

廬生は夢に枕の中の世界の人となる。試験には及第する、官吏にはなる、一時は國政の大權をも握つたが、冤罪によつて處刑せられようとし、漸く冤が雪がれてまた宰相となる。五人の子も立身する、孫は十人の上を越した。段々と老衰したので致仕を願ふと、上命あつて慰留される。さて死に臨んで今しも息が絶えようとする時、夢が覺める。この時客舎の主が炊いて居た黄粱はまだ熟さなかつた。廬生ははじめて人生の榮華の意義なき事を知つた。

これが「一炊夢」では誂へた蕎麥がまだ來ない中の清太郎の榮華の夢とする。故に題名の上に「榮花程五十年蕎麥價五十錢」と冠書する。

夢を古しといふのは、「榮花夢」以來屢々くりかへされた爲である。黄表紙の趣向はもと見る人の意表に

出づるを主とする。故に夢が頻りに利用せられた。けだし、黄表紙はその時代の風として奇抜の想と共に思ひ切つた寫實を要求せられる。京傳は此間に夢の趣向を出す故に古い新しいの辯をなさざるを得なかつたのであらう。しかも夢の成立を説き、夢の組立を説いたものはこれまでに見なかつた。

馬鹿長命子氣物語

二冊

櫻川慈悲成の作、歌川豊國の畫、寛政三年伊勢屋の板、

慈悲成ははじめ「親の慈悲成」といひ、後に櫻川と名乗る。暫亭はまた芝樂亭と號す。岸田杜芳の門に入つたが、其年、師の死に會した。輔師とも飭屋とも陶器屋とも傳へられる。馬琴は評していふ。慈悲成は古き草雙紙の作者なれど當り作なし、文化に至つて落語を専門にしてまた草雙紙を作らず、落語は草雙紙の手際に似ないで上手で可樂、夢維久、馬馬と頡頏したと。さまでの傑作はないのは事實であるがまた知名の士であつた。豊國は美人繪役者繪を以て知られて居るが、また黄表紙の挿繪を描くことも多かつた。「馬鹿長命子氣物語」の題名は後生樂故に長命する男の子供らしい物語といはせながら「長明四季物語」



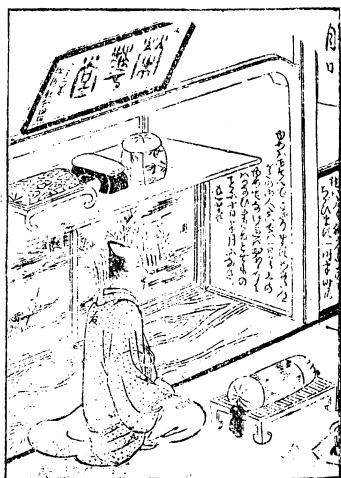
徳 見

と附會して「馬鹿」を上^{うへ}に置いたのである。

「四季物語」は長明の著といふものゝ實は僞書であることは明であるが、それはこの作者の關せざるところである。作者は「四季物語」が四季に分ち、十二月に分つて、年中行事を説き、その由來を語ること^に做ひ、年中行事をば滑稽に解釋すればよいのである。即ち牽強附會を恣^{あし}うして、笑ひを招けばよいのである。この種^{しゆ}のものは黄表紙の通性であるが、こゝに稍注意を要するは、これが「四季物語」の形骸^{けがい}を假^{かり}りるだけに努めて古典めかさうとする事である。

おもふに寛政頃は國學が隆盛を極め、語義語原の研究が頻りに行はれた。慈悲成はその傾向を追うて、この滑稽を弄^{もよほ}するのであつたらう。しかも彼が後に落語に名をなし得るやうに、この種の手法には長じて居たことであらう。

三月の條、彌生を矢野の山川に酔^よる故に矢酔^{やそ}の節句と解して、「俗説に」と斷り、なほ「いかにも古事つけな事と聞えます」と加へて、他の附會を眞面目らしく装はうとする。また正月の條に正月の諺名を親玉へ付云々はすべて役者の紋所についていふのであるから、「はくせつ」といふのは幕の内の意を以て幕説ときかせてしかつめらしく装ふのでなからうか。彼が當り作の乏しい中に、この書の推さるゝもかういふ點にある



一 炊 夢

であらう。

世上洒落見繪圖

三冊

京傳の畫作、寛政三年、葛屋の板。卷尾に菊亭主人畫とある。菊亭主人とは京傳の別號である。何故に亭に命ずるに菊を以てしたかといふに、この書出板の前年二年二月、吉原扇屋の遊女菊園が年滿ちて京傳の妻となつた爲である。本書の第二葉の菊亭の額に注意すべきであらう。

五年出板の「堪忍袋結々善玉」には菊軒の額を掲げたのである。菊亭、一に菊軒とも稱したためである。圖中、机に倚れるは京傳、坐客は書肆葛屋主人重三郎、茶を薦めて居るのはもとの菊園、今のおきくである。裾模様は菊花は、それと知らせるためである。

題名の「洒落見」は勿論「細見」のもぢりである。京傳は當時の洒落、また通の行過ぎを更に誇張して笑に資さうとする。この種の趣向はすでに三未來記に存する。京傳もとより、これを模倣する。京傳みづからにしても、天明七年には傑作「三筋緯客氣植田」がある。幼兒を吉原に連れ行きて、自らはその幫間となつて悦ぶ様な通人の行過ぎを叙したものである。



忍 堪

題 解

京傳は今それらの趣向を題名いふところの洒落に籠める。即ち洒落を「しやれかうべ」のしやれと解して、あらゆる通人がしやれて石のやうになり、結局彌勒菩薩の洒落のなき世となるといふにおちをとる。書中また天道様の案内がある。これは前年の作、「京傳浮世醒醒」の趣向をとり入れたものである。その厄介仙人を天道様にしたのであつた。

昔々桃太郎發端話説

三冊

京傳の作、勝春朗の謄、寛政四年萬屋の板。

春朗とは後の葛飾北齋である。春朗は勝川春章の門に居た時の名である。また黄表紙の作がある。時太郎可候、是利齋などの作名を附して居る。

桃太郎は赤本以來黄表紙となつても屢々繰りかへされる。その趣向の多くは桃太郎をして、いかにもして當世化さうとするにある。

「發端話」は題名がすでに示すが如く、桃太郎未生以前のことを語る。しかも意外にも舌切雀を骨子とすることが作者の得意であつたらう。作者はまた赤本古風の昔をしのばせようとして、書込の言葉の中につとめて赤本時代の口調を現はさうとする。たとへば「てんこちも無いよい天氣」「てんやわやのあく」「何とす



袋

さまじからうがや天井を見たか」「牛の角の切口太いが根付と來たわ」などを數へる事が出来る。

作者またその古さを古典の上に結びつける、序文の「古今集」の序によるもそれであらう。更に童話の原流に溯らうとする、これ亦當時流行の考證癖を現はした作者の好みであらう。舌切雀の原據を示すために「宇治拾遺」を引くが如きがそれである。また實方雀を趣向とする。このことは早く「十訓抄」に見える。

「實方藏人頭になられてやみにけるを恨みにて執とまりて雀になりて殿上の小臺盤に居て臺盤を食ひけるよし、人いひけり」

但、作者はこれを引用しなかつた。

十四傾城腹之内 三冊

全交の作、重政の畫、寛政五年鶴屋の板。

この作の趣向はいふところの經絡を傾城に附會することである。十四傾城の十四には別に意味がない、たゞ十四經絡をそのまゝに襲ふに過ぎない。

十四經絡とは漢方醫の人身解剖圖によつて明にされる。滑壽の「十四經絡發揮」において見ることが出来る。全交はこれを「發揮」そのものに據らずして、岡本一抱の「十四經絡和語抄」から取つたと思はれる。



經 四 十

經絡とはいはゞ身うちの筋である。手に三陰經三陽經足に三陰經三陽經がある、すべて十二種、それに任脉、督脉を合はせて十四經となる。それらの經は心、脾、胃、肺、肝、膽、腎、膀胱、大腸、小腸等と起止を保つ。作者はかういふ身内の機關の活動をうつして滑稽を弄する。醫方の眞面目なものはじめから諧謔の材とするところがこの作の出發點であらう。十四經筋圖の「仰人尺寸之圖」「伏人尺寸之圖」が「眞向成嘘言吐圖」となり、「後向尻抱者誤圖」となる。これが黄表紙の作者の常法であるにしろ、全交はその材料を意外のものから得たことが味噌であらう。當時大に喝采を得、また三馬から名作二十三部の中に數へられた。

一九は寛政十一年に「腹内養生主論」を作つた。二者を比較すれば、おのづから作者の相違を明にするであらう。

一九は全體の構想を「腹之内」に據つた。たゞし、これは傾城を避けて養生訓とする、故にまづ夢に貝原益軒が現はれて身内の活動を示すことにする。そして口があまりに働きすぎるので脾胃の苦しみ、腎の悩みを來すことをいひ、中に元氣と精氣との色事を交へる。しかも所々に醫書を引く。すべてに亘つて全交の放膽とひとしなみに見ることが出来ない。



絡圖

「腹之内」のはじめに傾城の心の内を示すのに心の臓からいろ／＼の相の展開せられる図がある。思ひつきとして面白いものであらう。即ち三馬は文化八年の「腹之内戯作種本」には、これをそのままに摸して、戯作者の腹のいろ／＼の考を示した。心の臓の形の中にある心の臓の字を消して式亭の印を捺したのがまた一興であらう。この書の初名は「式亭三馬腹之内」であつた。

榮花夢先生
後日話

造化夢

三冊

京傳の作、重政の書、寛政六年葺屋の板。

京傳はさきに「誕生夢魂其前日」を作つて、「榮花夢」の後を承けた。今また「榮花夢後日話」と銘うつて再金々先生を生かさうとする。この場合前作と全然異つた工夫を用



腹之内戯

ゐるが眼目であらう。

邯鄲夢の本來は教訓である。春町はそれを假りてあらぬ方に用ゐた。京傳は春町と異つた方向をとつて教訓にかへす、しかも呂翁の教訓と同じでない。京傳は夢から覺めた金々先生を悟りすました者とする。人間の萬事を疎んずる者とする。その行過ぎを世間にかへして再び人間の意義を解させようとする。しかし、斯様な論は京傳の深く問題とする所でなかつた。恐らくさういふ事をば世の心學者に委ねてのける事であらうが、こゝに京傳は心學めく教訓を説くやうな顔をして、實は日常の生活に細い穿ちを與へる。一碗の米、それに手數がかかる事は心學者もいはうが、斯ういふ隅の隅までの穿ちは遂に考へ得なからう。

この書が當り作として世間に沙汰せられたのはその爲であらう。但仙界には茶を煮る水もないので金々



稿 草 本 種 作

先生の爲に新に井戸を堀るといふ以前に、丁稚の仙人がお茶を汲んで出すの失策もあるが、これも穿ちの細さに追はれた爲であらう。また一寸した事ではあるが、米の成立なども米のなる木を知らぬ江戸の黄表紙讀者には珍しかったらう。まして雨を降らせ、風を吹かせ、雷電を働かせる工夫また畫組みは作者京傳の政演がさきに杜芳の「草雙紙年代記」のために描いたのと同じものである。蓋、作者が得意を以て下繪をものして重政に附した事であつたらう。

忠臣藏前幕無

三冊



親 鑑



草 雙 紙



榮 青 勝



記 代 年

京傳の作、重政の書、寛政六年の板。忠臣藏は黄表紙中にも曾我狂言と共に異作が極めて多い。人口に膾炙し、世間に熟知せられた事件は、それを種々に轉成するところに黄表紙作者の手腕を揮ふ事が出来る。忠臣藏に異作の多きも當然であらう。忠臣藏を巧みに黄表紙の題材としたのは喜三二である。その「案内手本通入藏」は所謂忠臣藏の範を示したものだといはれる。その後の幾十部中に於て京傳の此の作は同年の「忠臣藏即席料理」と共に傑作と稱せられる。「即席料理」のをかしさはすべてを料理に附會する事である。即ち定九郎の死を鰻の中毒とする。といふ意は鰻はよく當るとて鐵砲の異名を負うて居る爲である。

「前世幕無」とは三世の因果は現世過去未來連絡してその間にたゆる事なしとて、延つゞけの狂言に見なし

ての事であるが、因縁話だけに牽強附會は「即席料理」より自由である。奇想往々失笑せしむるものがある。しかし、定九郎の鐵砲の死を鰐に結びつける事は「即席料理」と同様であるが、さすがにその傘を猪の包紙に見立て、なほこの傘も前生故新しと言葉をつけ添へ、また九郎助稻荷を背景にする程のをかしきがある。この因果譚は「天道大福帳」に於ける忠臣蔵の事件が、一々天道様の意圖に出づる趣向なのを延長して、こゝまで到達させたのであらう。即ち京傳の前年の作、「四人詰南片傀儡」はその中間に位置する事が知られる。これはすべての善惡禍福が鬼と佛との人形遣の遣ふ傀儡の因果の絲によつて決するといふ趣向で「南片傀儡」とは南京あやつりのもぢりである。もし三馬の文化二年の作「親鱒防膏藥」を以て



忠臣蔵即席料理

これ等と對照すれば、自ら趣向のうつりゆく様を明にする事が出来る。これは「大福帳」「前世幕無」其他を摸倣するものであるが、忠臣蔵の世界を鏡山に變更し、上中二卷を復讐の前生とし、下卷を鏡山の現在とす

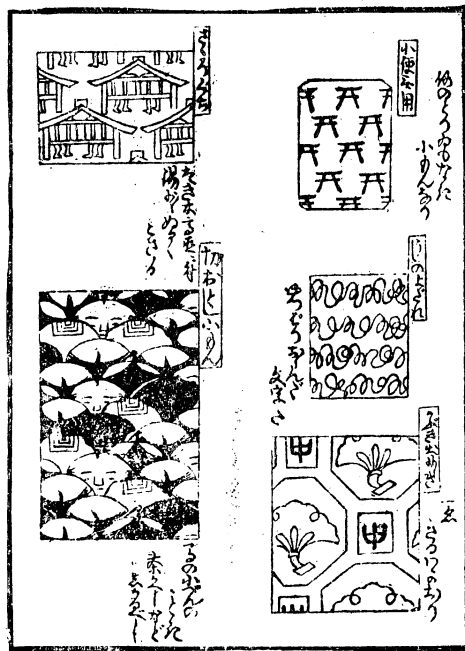
る。忠臣蔵の筋書と「前世幕無」とを一つにした事となる。なほ上中下共に上欄に天道様と天人とを配する事は「大福帳」そのまゝである。

世諺口紺屋雛形

三冊

曲亭馬琴の作、子興の畫、

寛政十一年葛屋の板。馬琴は瀧澤氏、名は解、字は瑣吉、著作堂、養笠隠士などの別號がある。讀本界の巨星であるが、はじめは黄表紙を作つて居た。寛政三年、京傳門人大榮山人の署名で公にした「廿日餘四十兩盡用而二分狂言」にその才氣を見せ、七年の「四遍摺心學草紙」の當り作によつて其の名を知られ、九年の「先筆節用似字盡」また佳作



小 紋 雅 話



膳の同門、榮松齋長喜の別名である。
馬琴の黄表紙は、兎角に理にからむ事によつて輕妙の趣を
缺く。本篇の如き、洒落をまづ呉服の地質、模様、紋所に盡

として聞える。「作者部類」にみづから自
負して「流行江戸のみならず、京浪花にて
も人の賞玩大方ならず、こゝをもてその習
年京師より新織の金襴緞子の似字を織たる
を江戸へ送りこしたり」といふ。その他二
三の迎へられたのもあるが、つひに讀本よ
り見れば劣る事数等である。畫工子興は歌

兒訓影繪噺



して、次にその譯合を説く、その説方にはつひに京傳の奇警も輕快もないのが缺點であるけれど、また往々その丁寧ぶりを悦ぶ者もあつた。「似字盡」及びその後篇の「龜相案文當字揃」が喝采をうけたのもそれが爲である。そのいかに京傳と異なるかは「小紋雅話」に於ける模様の案じとこれのとを比較すればおのづから明であらう。こゝにその一葉を掲げる。この洒落はつひに馬琴の解し得ざるところである。但、これは黄表紙以外の物であるが、黄表紙の類型と比べたならばどうであらう。京傳の作中に、寛政十年の「兒訓影繪」十一年の「京傳主十六利鑑」享和二年の「通氣智之錢光記」三年の「裡家算見通片鋪」がある。これ等、右の框内の模様と框外の説明とを對照せしめる趣向は全然同じであるだけに、二者の才氣がよく比較せられる。よしその説明はともあれ、繪の趣向はつひに京傳の奇なるに及ばぬ事が一目にして認められる。



通氣智之錢光記

又燒直またやきちやう 鉢冠はちかん 姫ひめ 稗史はいし 億說年代記いせつねんだいき

三 冊

式亭三馬の畫作、享和二年西宮の板、「浮世風呂」「浮世床」の作者として有名なる三馬は通稱西宮太助、書肆の丁稚より身を起し、寛政六年、十九歳の時、黄表紙「天道浮世之出星操」及び「人間一心視替操」を著した。その十一年「俠太平記向鉢卷」を出版した。それは前年のよ組の火消人足の喧嘩をあて込んだので、彼等の怒に觸れ、板元及び自宅を破壊せられて裁判沙汰となつた。爲に三馬の名が世に弘まつた。



記 平 太 俠



紙 雙 草



向 針 卷



年 代 記

三馬が獨力にて名を成したのは、書肆の丁稚時代に草雙紙を耽讀した結果であるといふ。「稗史億說年代記」の素はその頃から出來たのであらう。しかし、これには岸田杜芳の天明三年「草雙紙年代記」といふ先蹤が存する。杜芳は小町、四位少將と黒主の戀の經緯を叙しながら草雙紙の變遷を示さうとする。繪も、繪解も、言葉もさながらに現はして年代記に擬する。

はじめに目錄を曆風に現はし、中に鳥居、吟雪、丈阿、春町、可笑(清長)、全交(北尾)、芝蘭(北尾)、通笑(關壽)、喜三(花藍)の作者畫工の名を擧げる。鳥居、吟雪、丈阿の赤本黒本時代を示すものは人物を公卿妾にして、妖怪を出現させるが、黄表紙時代の世話となるところでは、金々先生と其女房をして小町少將を當

岸田社芳戯作

香き

ふりふれ

神曆



草 雙 紙 年 代 記

世風に改めさせるなどのをかしさがある。作者時に讀者を驚かす。目録を見れば、通笑の部に「少將女郎買をはじめる」とある。教訓の通笑をばどうしてと思はせながら、本文には小町の嫉妬せぬ事を説いて通笑の通笑たるものを會得させるなどの工夫がある。今これを三馬の作と比較すればその基くところが明かであらう。即ち「又焼直」といふ譯である。三馬が鉢冠姫を

題材としたのは便よきためであらう。何となれば赤本時代よりくりかへされる趣向で、しかも黄表紙時代となつては世話にくだいたものも少くないからである。三馬は自ら諸家の繪を摸し、文の調子を傳へると共に、草雙紙知識に資すべきものを舉げた。たとへば地本問屋目印、戯作者名寄、草雙紙の體裁の變遷、名作青本略記として傑作二十三部を數へる。今も名作二十三



草 雙 紙

部の名によつて呼ばれるものはこれである。但、往々にしてその記載に誤謬がある。たとへば喜三二の「鼻峯尚慢男」を春町の作とし・馬呼人の「腔多雁取帳」を喜三二の作とするが如きがそれである。赤本黒本の變遷を説くところ未穿鑿の至らざるものがある。作者自らもそれを知つて億説といふのであらう。しかも後人が便を得る事は少々でない。

延えん呼こ尺しち 御詠染長壽小紋

三冊



年 代 記

京傳の作、歌麿の畫、享和二年蔦屋開板。黄表紙の面白さは繪と文とが一つに動く點にある。もし黄表紙の文が單なる繪解に過ぎなかつたなら、その面白みは半減せられるであらう。傑れたるものといへば、全體の趣向も勿論であるが、繪と書入が不即不離の關係を有つ事であらう。京傳の作は、もとゞゝ畫工出身の人であるだけに、その點にぬかりはなかつた、その佳作の多いのも偶然でない。さてまた文と畫とは、時に繪と字との關係を見る事がある。なほあして書の面白さを見せる事がある。「虚出實草紙」のひまの二文字を繪にあしらつたのもそれである。この「御詠染長壽小紋」はその案じておしてゆく。但、命の字を繪模様にしたのは已に寛政八年の「鬼殺心角樽」の中にもある。

京傳はその工夫を復活し、更に擴充したのが此の一篇である。作者は命の繪模様を利用する事が出来る場合々々をこゝに拾ひ集めた、故に全體を通ずる趣向といふものはない。故に作者はこれを巻末に於て、笑が命の藥であるとして、此繪草紙を御覽じて命を延ばせといひ、お年玉にもつて來いのめてたい冊子といひ結ぶ。題名の「延命長尺」といひ「長壽小紋」といふのはそれが爲である。もとより「命」は紋形をきかせたのである。

京傳に「小紋雜話」があり、「奇妙圖彙」がある。皆これと同一類のものである。たゞ黄表紙の形式をとらなかつただけである。即ちこれ等は文を以て對應する事がなかつた。

この命の字の趣向は多くの模倣を産んだが、天保板の樂亭西馬の「心學命洗濯」に至つては九盜みとして笑ひ棄つべきであらう。

的中地本問屋 二冊

十返舎一九の自畫作、享和二年村田の開板。一九は重田氏、名は貞一



出 虛

通稱を與七といふ。「膝栗毛」の作を以てその名世に喧傳する。黄表紙は寛政六年の「心學時計草」の自畫作をはじめとする。これが好評であつた爲ひき續いて著作に従事したものの、さまでの當り作なく、たゞ中本に於て其の名を成し得た。

鬼殺 心角楳



戯作者が自傳めかすものを綴る事は喜三二の昔から絶えなかつた。黄表紙を玩ぶ者が悦ぶ爲であつた。更に地本問屋の樂屋内を見せ、いかやうにして一冊の黄表紙が出来るかを説明する。まづ作者の原稿が出来上ると、彫りにかゝる、次に刷る、丁合をとる、前後上下を切り

紙 草 實

揃へる、表紙をかける、草紙を綴る、さうして出来上つたのを小賣の本屋におろして歩く。三馬はこの順序を示しながら、事を誇張して例の滑稽を弄する、作者には馬糞干鰯鋤、彫師には富士噴火の折の舊琵琶の水、刷師には朝比奈景清の腕を黒焼にしたものなど飲ませるなどのをかきさを見せる。また草雙紙の賣出には蕎麥の祝ひがあつて作者も招かれる事を説いて、蕎麥の様に身代も延びると祝儀の言葉で以て結ぶ事例の通りである。

これは一面村田屋の廣告ともならう。黄表紙には、たとへば京傳の如く、書中に自家の廣告をなすものが甚多い。故にこの様な事もあやしむに足らないが、三馬の如きは此年に全然はじめから廣告づくめの「仙方長壽綿溫石」の如きをも出して居る。但これは自家のではなかつた。

一九は今年村田屋の爲に廣告もどきを書くと共に、また岩戸屋の爲に同じ様のものを作つた。これは作者自身の作の成り立ちを主として居る。一九は同じ様な趣向の「屈伸一九著」を岩戸屋から出した。これは前の二著にわづかに觸れて居る前年の銚子潮來の旅を主題とするものである。同年同時に似たり寄たりの作を同じ店から出し、外からも出すなど、悠長な一九であり、一九の時代である事を考へさせられる。

人間萬事吹矢的

三冊

京傳の作、重政の畫、享和三年鶴屋の板。こゝにいふ吹矢的といふは、からくりのとて、矢が的に當れば綱をつけてある人形を出す。からくりになつて居る物である。その人形はいろいろで、鬼も、蛇も、朝比奈も、化物もある。また人形ばかりでなく、家もあれば山の形もある。京傳は吹矢的に當らぬ理を、心の

正しきか正しからぬか、息の長きか短きに關する事として例の心學流の洒落を用ゐんとする。人の心と吹矢の店の縁の下には何が潜むか知らぬものとし、矢が的に當るのによつて心の正體そのまゝの人形が現はるとする。この趣向は京傳に於ては屢々くりかへされた。たとへば、その人形と人の心との關係は「假名手本胸之鏡」の人物と鏡にうつる人物との關係であらう。或は一人心鏡「寫繪」の人物と心の鏡にうつる本心との關係であらう。「吹矢的」には京傳自筆の稿本が存して居る。これとの對比が黄表紙出版の事情を一九の「地本問屋」と共に闡明するであらう。



うか。但、後者の場合はすてにうつる者とうつる姿が人反對をなすのである。鬼に角これ等の趣向を吹矢的によつて新しきを見寫したのである。しか繪も吹矢の人形の言葉書が一々洒落を盡して居る事が注意すべきであらう。

黄表紙は多く新春に出板する、作者はそれに間に合せる様に原稿本を纏めねばならぬ。しかも作者は少くも数種多くて十数種を出す、それが黄表紙だけでなく他の種類のもの、筆を執る。勢俊れがちになるので本屋からは矢の催促をうける。「地本問屋」に於て、作者一九が馬糞干鰯入の酒を飲ませられたのはその作をよく早くする爲である。作者自身を現はして居る黄表紙には、きまつて本屋から催促を受けて困却して居る有様をしるしてある。

ところで黄表紙を書く時は、何にせよ、繪を主として居るだけに作者自ら下繪を描く必要がある。京傳の如きは畫家出身なる爲に下繪は易々として描く事が出来る、のみならず略畫のおもしろきが見られる。また繪組に工夫を凝して、描きかへたあとも見られる。作者は下繪を示すと共に畫工に對して注意を與へ注文を附ける。「此草紙、繪は吹矢の人形の氣ドリニテ御書可被下候。上ノ段ハ人形ノ氣トリ、下ノ段ハ常の繪也」とも、「わりよりも肉を大きくして、的のうちの字は目立様に御書可被下候、」とも「吹矢的」では重政に對して注文をつけて居る。「また序文についても重政に注文をして居る。」此序文北尾先生へ御願、筆工トモ御書可被下候。文字アラク律義ニヨメ安キ様ニ、印校合ノ節此方ニテハリ入申候」とある。畫工は挿繪を描く外本



假名手本

文の筆耕をもなす場合がある。こゝの重政はそれである。また古くは「榮花夢」の如きは自作ではあるが春町が板下をも書いた、しかし多くはそれを専門に職とする者に委せる。

重政への序文の注文中に校合といふのがある、ハリ人といふのがある。それは彫り上つたものを校正するのである。その誤字を朱書にし、或はハリ紙をして、最一度彫り直させる。今板本と稿本とを比較するに往々にして異同を見る。たとへば龍宮の玉の條が、板本に「魚は龍宮の家來にてよく玉を守護す。これを守る

玉は主人なり。よく守るは役目に怠らぬなり」とある。これを守る玉は云々ではどうやら意味が通じない。稿本は「魚は龍宮の家來にてよく玉を守護してこれを守る。玉は主へなり」とある。これではじめて會得せられる。これは筆工の誤である。また廬生の夢、及び春駒の所が、板本には「きん／＼たる息子株は手漬をかむ爺と變る、田鼠化して鶉となり、白紙芥子之介が鰯となり」とある。こゝの白紙とは何であらう。芥子之介の姓か、また異名かと疑はれる。芥子之介といふのは、當時淺草の奥山に手品を演じて居た辻放下師^{つやはうかし}である。眞桑瓜を鰯とかへる曲藝をなした。ところで稿本を見ると「白紙芥子之介で鰯となり」とある。白紙が眞桑瓜と同様手品によつて鰯となつたのである。で、をがとした筆工の誤はつひに後人をして幾度か首を傾



鏡 之 胸

けさせる。

京傳ははじめ、此の作に「有金時、有化物、人意吹矢的」とし、下巻を草するに及んで「人間萬事吹矢的」と改めた。下巻表紙に附記していふ、

「上巻中にしるし候外題はやめて、此通りの外題に仕候間、割印御帳面へ此通りの外題御記し可被下候。」これは板元鶴屋喜右衛門に對しての言葉である。割印御帳面とは稿本出板許可の割印を係から捺して貰ふ帳面の義である。當時に於ては草雙紙の出板は一々地本問屋の行事によつて取締られて居た。

京傳の稿本は斯くの如き事を教へる。また巻尾の一枚が板本と稿本と異つて居る事が注意せられる。こゝには人物も二度描き直されて、しかも最後には全然改められて板本の如くなつた。作者が色々に頭を捻つた様子が髣髴として見える。なほ稿本に於て披露せんとした京傳の述作目録の中、人相手紋を書きかけたのは「裡家算見通座舖」である。京傳は今年、鶴屋から「怪談模々夢子集」「悟道迷所獨案内」をも出してゐる。京傳の今年、享和三年の作は、黄表紙として以上の他に「分解道胸中雙六」がある。また讀本に「安積沼」があり、滑稽本には「奇妙圖彙」がある。

なほ参考の爲に、同年にどれ程の黄表紙が出板せられたかを書きつける。すべて五十餘種、その中、京傳の五種以外、おもなるものを擧ぐれば、楚滿人(八) 一九(八) 馬琴(四) 虚呂利(五) 石上(三) 鬼武(三) 榮女(二) 猶錦(二)などである。他は一種宛、慈悲成もそのうちに數へられる。

これを題材から見れば、敵討物が殆ど半に達せんとする。また楚滿人の活動ぶりが注意せられる。今年は「敵討義女英」出板の後、九年目に當る。

校訂餘言

黄表紙二十四部、稿本を合はせて二十五部にいきゝかの解題を附し終つて今更にかへりみせられるのは、選擇の宜しきを得ざる事である。二千部の黄表紙中にわづかに二十四部を取るのて、すべてが思ふまゝにならず、もとより他に缺く可らざるものゝある事を知りながら、善本を得ざるために削除せねばならず、殊に風紀上探るを憚らねばならぬ事もあり、旁收載の不備を致した。その收載せられたものゝ中にも時にいかゞはしき繪や文や言葉の削るのやむなきに至れるものも往々にして存する。校訂者として慥しむところであるが、事情やむなきに出づる。その個所、また削除の程度の如きは、これを編輯者より聞かれん事を望む。しかし、二十五部とはいへ、これを通じてやゝ黄表紙の面目を傳へ得たといふ事も、或はゆるさるべきであらう。

黄表紙の歴史の上から見て當然探るべくして、わざと省いたものがある。南仙笑楚滿人の作「敵討義女英」は其の一つである。これは豊國の畫、寛政七年景市の出版、非常な當り作でその影響甚大を極め黄表紙の作風を一變したともいはれる。今こゝにその梗概を叙して補遺とする。

源頼朝の時代、駿河の郷士に桂新左衛門といふがある。とかく病身ゆゑに一子淺太郎を連れて伊豆の温泉に行き下總の土舟木逸平と同宿する。逸平も一子茂之介を伴つて居たが、十五歳と十四歳との二人の少年は將葉の戯から口論をし、はては刃傷に及ばうとしたが、親々の扱にて仲直する。逸平は新左衛門の角たてぬ扱ひぶりに敬服する。しかし茂之介の心は平でない、父と共に歸國する際、父に秘して淺太郎と決闘して、

つひに殺した。新左衛門は淺太郎の死骸を見、またその場に落ちてある逸平の手拭を見て、下手人を逸平と思ひ込む。一方又茂之介も淺太郎に切られた傷がもとで旅中に死亡する。新左衛門は家に歸つて病死する。七つの子岩次郎に兄の敵を討つべき事を諭す。岩次郎は十六歳となつた時下總に下つて逸平の動靜をうかがふとて、しばし一僧普の庵室に身を寄せる。その間、竹筍齋の娘小しゆんと契をこめる。竹筍齋んとする、逸平の竹筍齋は之を留めて事件の真相を語り、その因縁を正して、岩次郎を養嗣とする。岩次郎は郷里より母を迎へ、實父養父の知行を合せ領してめでたき生涯に入る。



最後に校訂者として慙愧の一言を添へる。

二十四部中いかにしても読み難く、先輩にたゞして得ず、つひに缺字にした二個所が存する。一つは「馬鹿長命子氣物語」三七六頁の書入れ「京棧にしようと思つたが唐棧」と「どうだ」との間の數文字である。或は「唐棧鐵色でよからう」かとも讀んだが、唐棧の鐵色も異なものと思はれるのでやめた。同じ場所の「羽織のとう」と「ありか、ありか」との間の數文字である。「ありか、ありか」はもとより「ありがたし」を意味する「ありが」の濁點を逸したものであらうが、中間の數文字は二字か三字か、遂に意を以て迎へ讀む事が出来なかつた。も一つの個所は「莫切自根金生木」一九九頁の書入れ「お金をつけると云々」の上二字である。

其の他誤つて讀み、誤つて字を當て、しかも氣づかざるものも少くなからう。殊に洒落の場合に於て多からう。たとへば「十四傾城腹之内」四七九頁の「火燭奉公」は「臥煙奉公」または「臥煙奉公」であらうが、火燭の洒落に囚へられ過ぎ、「御詠染長壽小紋」六二〇頁の「忒利天」は「通り天」であるべきを、やゝ理に泥み過ぎたのがある。畢竟校訂者の無識不通の然らしむところである。

